

～東日本大震災から9年～

東北の復興を支える道路

国土交通省 東北地方整備局 道路部

1. はじめに

東北地方の太平洋沿岸を中心に未曾有の被害をもたらした「東日本大震災」から9年の月日が経過し、被災地においては本格的な復興に向けた諸事業が関係機関で積極的に進められています。

被災地復興のリーディングプロジェクトである復興道路・復興支援道路（以下「復興道路等」）は震災後、三陸沿岸道路等の未事業化区間全てが事業化され、現在、復興・創生期間内の全線開通を目指し、関係者の皆様の献身的なご尽力のもと、整備が進められています。

2. 復興道路等の整備状況

復興道路等は、国土交通省が中心となって整備を進めている路線全長550kmのうち418kmが開通し、残り132kmについても復興・創生期間内の2020年（令和2年）度までの開通にむけ鋭意整備を進めております。

開通済の区間のなかでも特に2019年3月に開通した三陸沿岸道路釜石南IC～釜石両石IC間、及び東北横断自動車道釜石JCT～釜石仙人峠IC間の同時開通は三陸沿岸道路と東北横断自動車道とが連結することになり、港湾施設や自動車産業等、物流を大きく支援することになります。



図-1 復興道路・復興支援道路の整備状況



図－2 三陸沿岸道路と東北横断自動車道が連結（2019年3月時点）

3. 主な整備効果

復興道路・復興支援道路の整備によって移動時間短縮や物流効率化、復興まちづくりの加速化のみならず、被災地が元気になるような事例も多数あります。

・東北で唯一のラグビーワールドカップ 2019™ の開催地釜石市（岩手県）を支援

釜石市（岩手県）は「新日鉄釜石ラグビー部」が1978年から1984年にかけて日本選手権を7連覇と活躍したことからラグビーの町としても知られています。

今回、釜石市が東北で唯一の開催地となったことから、地元岩手県や釜石市は、東日本大震災における支援の感謝と、復興の姿を世界へ発信しました。

道路整備により会場から宿泊施設や空港や駅等へのアクセス性向上が図られました。

2019年10月13日開催予定であったナミビア対カナダ戦は令和元年東日本台風のため残念ながら中止となりましたが、カナダ代表が土砂や泥の撤去ボランティアを行ったことは大きな反響となりました。



図－3 釜石鵜住居復興スタジアムに近接する釜石北 IC

・気仙沼湾横断橋（仮称）

気仙沼湾横断橋（橋長 1,344m（鋼斜張橋 680m + 連続箱桁橋 664m））は三陸沿岸道路を構成する気仙沼道路に架かる橋梁で、完成すると東北最長の斜張橋となります。

本橋を含む気仙沼道路の整備によって、気仙沼湾を大きく迂回する現道 45 号に比べ、気仙沼湾を横断することにより走行時間の短縮や、世界三大漁場の一つである三陸沖を操業域とする水揚げ港、遠洋漁業の基地である気仙沼漁港からの輸送時間短縮などといった整備効果が期待されています。

また、同時に地域の復興のシンボルとしても大きな注目を浴び、地域でも橋を活用した様々な取り組みが検討されています。

気仙沼市では、夜にはライトアップで海上の橋を浮かせ上げる構想など、橋の利活用について盛り上がっております。



写真 1 整備が進む気仙沼湾横断橋

4. 震災伝承の取り組み

一方で震災を風化させない取り組みも行われています。取り組みの一つとして被災した青森、岩手、宮城、福島各県の産学官民が連携し「3.11 伝承ロード」を構成し、各地に存在する震災伝承施設を有機的に繋ぎ各地の啓発・伝承活動を活性化するだけでなく、新しい地域振興にも貢献できることを目指しています。

参考 URL <http://www.thr.mlit.go.jp/sinsaidensyou/sisetsu/facility/>



図-4 震災伝承施設案内標識のイメージ



図-5 3.11 伝承ロードパンフレット



写真2 震災伝承施設たろう観光ホテル（岩手県宮古市）

また、道の駅「高田松原」にも震災伝承施設を整備し、東日本大震災津波の事実と教訓を世界中の人々と共有し、東日本大震災津波を乗り越えて進む姿を、支援への感謝とともに発信しています。



写真3 国営追悼・祈念施設、東日本大震災津波伝承館等で構成される道の駅「高田松原」（岩手県陸前高田市）

5. 最後に

東日本大震災から9年の歳月を経て復興が進みつつありますが、一方で2015年の「平成27年9月関東・東北豪雨」、2016年の台風10号や昨年秋の「令和元年東日本台風」などによる被害が相次ぎ、東北地方整備局においても地域とともに復興に全力で取り組んでおります。

また、今年2020年は東京オリンピックの開催にあたり、福島県楡葉町のJヴィレッジが聖火リレーのスタートの地となる予定でしたが、残念ながら新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を鑑み、一年程度の延期となってしまいました。本オリンピックを復興五輪と位置付けているように、およそ一年後に東北の復興を世界に発信する予定となっております。東北地方整備局では、引き続き関係機関と連携し、復興五輪への協力を推進して参ります。